医療情報，何を伝えるどのように伝える？
～至適健康管理のための情報シェアリング～

一般財団法人　医療情報システム開発センター　渡邉　直

2000 年以降の 20 年で医療情報のデジタル化は広範に普及したが，その発展の過程で，さまざまな位置づけでの枠組みの構築や，収録内容の記載法，保存法などが，いわば思い思いに各所各施設にて実施された結果，二重の不統一が顕在化している．

一つはコンテンツの不十分不統一である．医療情報，ならびに健診情報を含めた健康・ケア情報の多職種多施設での共有が求められているにもかかわらず，共有すべき医療健康情報のコンテンツの標準化ないし規格化が進んでおらず，必要な情報が記載されている場合でも，診療記録内のどこにあるのか整理されておらず，それ以前的に必要情報が考慮記載されていない，という臨床教育上の不全もある．いくら共有システムで運搬しようにも，元々内容がない，という笑えない状況が発生しているのである．

もう一つは伝達の基盤（インフラ）の不統一である．各記録について，人間の目でみれば視認は容易であっても名辞やコード，単位などが不揃いでシステムに乗せても比較検討が出来ない場合が多い．各施設内では統一的なフォーマットや単位によって記録がなされているために歴の把握や比較は容易になっており，デジタル化情報のため，データ集積，統計処理や疫学研究等への活用もアナログ時代に比較して格段に容易になっているに違いないが，一歩外に出るとデータ共有や比較検討もままならない現状が見られるのである．これまでの限定的なランダム化介入試験等による EBM の構築のみに依拠してきた医療実践から，多施設からの多量データの集積とその解析による検討（real world data に依拠する health science）が必須となり，これが出来ないと国際的にも国内的にも適切至適な健康管理がかなわない時代に突入したというのに…

各研究者の努力や行政側の支援もあり，この 10 年ほどで，各施設を繋いで情報を共有する地域医療ネットワーク（EHR）が全国のどの地域においても敷かれ，利用可能となってはいるが，コンテンツの不十分不揃い，およびフォームの違いから中身を有効に共有できない状況のため，いわば，がらがらのハイウェイ状態となっている嫌いがある．このハイウェイ，敷設には行政側からの資金的サポートもあったが，今後の維持にもかなりの資金も必要である．しかし，その利用者がわずかでは…あるいは一地域で利用が盛んであっても．その圏域をこえるとたちまち連携，共有が出来なくなるようでは…

私の講演では，今日的な医療情報学の実践の場における，この 2 つの不十分を捉え直し，さらに，どのような解決法でどのように将来に向けてゆくべきかの提案もしてみたい．これを通じて，2020 年という時点における医療情報の現風景とかなたを展望していただければと祈念するものである．